

展示図録

懐かしい大正区の風景。

主催 なにわの海の時空館

(期間)

平成十八年三月十八日～五月七日



大正区役所

「懐かしい大正区の風景」によせて

あいさつ

大阪市の臨海部に位置する”港湾都市”である大正区は、江戸時代から北前船を迎える「みなとまち」として発展するとともに、綿などの農産物を産する新田が次々と開発されました。明治以降東洋紡績や栗本鐵工所などの発祥地として発展するとともに、当区船町にあった伊丹空港の前身である大阪飛行場は空の「みなと」として全国の基点となっていました。

現在でも、鉄鋼業をはじめ工業出荷額は全市の8位であり、臨海工業地帯の重要な位置を占めています。

一方で、戦後、区画整理事業などが実施され、道路、公園等の都市基盤が整備されました。その結果、現在では工業と物流に加えて、都心に近い縁多い住宅地ともなっており、「工業と住宅の調和のとれたまち」になっていきます。

このたび「なにわの海の時空館」の企画展で「懐かしい大正区の風景」が開催され、数多くの区民の方々が見学されました。今後のまちづくりに活かすためにも、展示された貴重な写真などを1冊の図録にまとめることとした。

本書が大正区のこれまで歩んできた歴史とそこに暮らされた区民の方々の息吹を後世の方々に少しでも知っていただく便（よすが）となれば幸いと思っています。

大正区長 西村 東一

はじめに

江戸時代の「天下の台所」大坂の物流を支えた当時の大阪港には、安治川と木津川の二つの航路がありました。その木津川と尻無川に挟まれた大正区は、この時代から現代に至るまで、大阪の経済を支える重要な地域でありました。

古くは新田の開発によって形成され、川や運河が整備されたこの地域は、海上交通に至便なため、明治期、昭和期と、時代の画期毎に多くの役割を担い、人々の生活もまた、そのなかで営まれてきたのでした。

本展では、写真資料を通じて、こうした大正区の変遷とともに、懐かしい風景や人々の暮らしの変化などをご紹介いたします。世代を超えて懐かしく、また新鮮で楽しいひとときをお過ごしください。

最後に、本展開催にあたり、貴重な写真や資料のご提供をはじめ、種々ご協力をいただきました皆様に心からお礼を申し上げます。

なにわの海の時空館

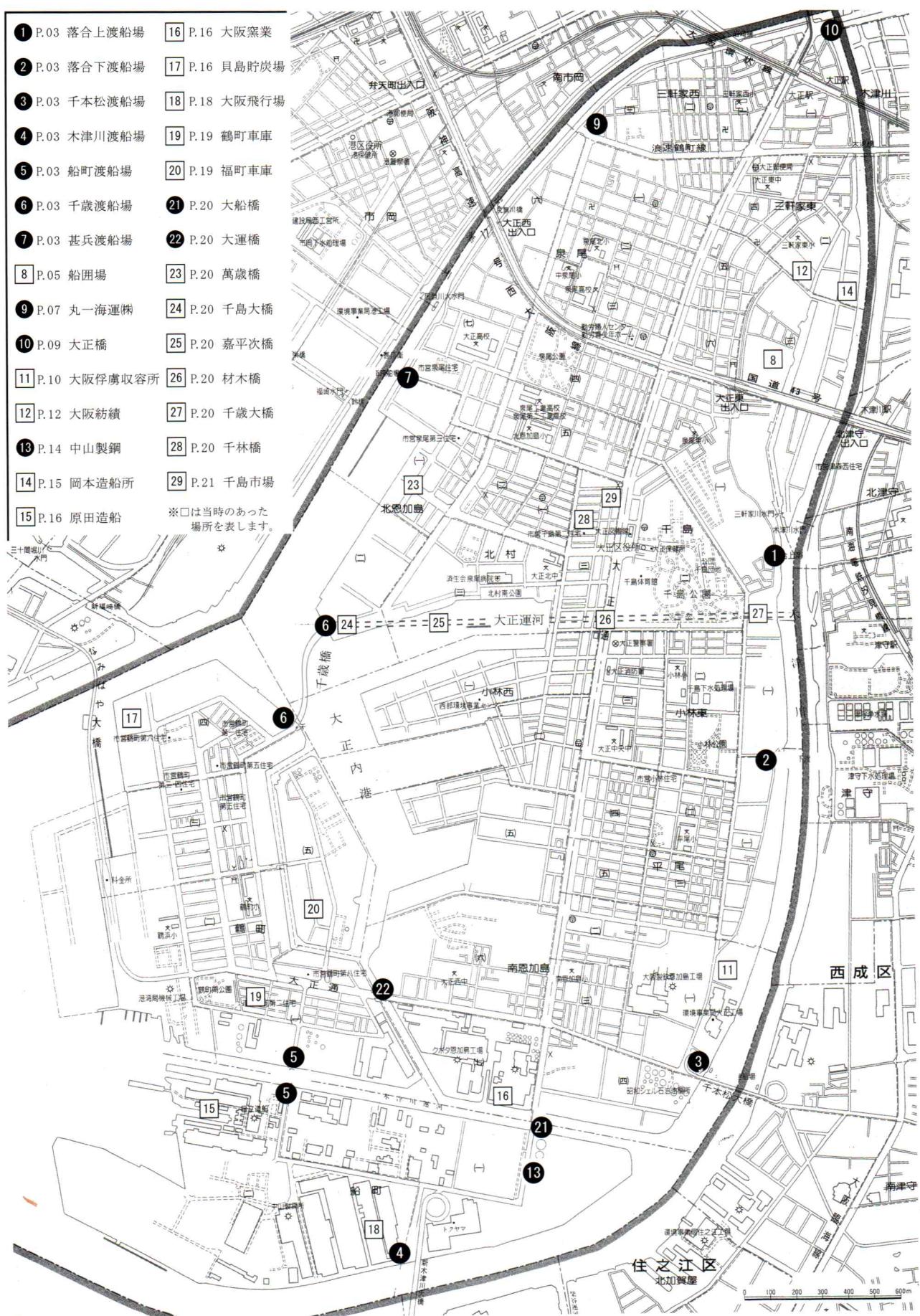
CONTENTS

大正区地図	P. 02	大正区の工業	P. 16
渡船	P. 03	貯木場	P. 17
大坂の玄関口	P. 04	大阪飛行場	P. 18
船囲場	P. 05	市電のある風景	P. 19
団平船	P. 06	大正区の橋	P. 20
丸一海運株式会社 寄託品	P. 07	暮らしの情景	P. 21
大正区の原風景	P. 08	台風被害	P. 22
大正橋	P. 09	大正運河	P. 23
大阪俘虜収容所	P. 10	盛土と高潮対策	P. 24
大阪紡績株式会社	P. 12	大正内港の修築	P. 25
株式会社中山製鋼所	P. 14	大正区のあゆみ	P. 26
岡本造船所	P. 15	開会式	P. 27

- | | |
|----------------|--------------|
| ① P.03 落合上渡船場 | ⑯ P.16 大阪窯業 |
| ② P.03 落合下渡船場 | ⑰ P.16 貝島貯炭場 |
| ③ P.03 千本松渡船場 | ⑱ P.18 大阪飛行場 |
| ④ P.03 木津川渡船場 | ⑲ P.19 鶴町車庫 |
| ⑤ P.03 船町渡船場 | ⑳ P.19 福町車庫 |
| ⑥ P.03 千歳渡船場 | ㉑ P.20 大船橋 |
| ⑦ P.03 甚兵渡船場 | ㉒ P.20 大運橋 |
| ⑧ P.05 船町場 | ㉓ P.20 萬歳橋 |
| ⑨ P.07 丸一海運棊 | ㉔ P.20 千島大橋 |
| ⑩ P.09 大正橋 | ㉕ P.20 嘉平次橋 |
| ㉖ P.10 大阪俘虜收容所 | ㉖ P.20 材木橋 |
| ㉗ P.12 大阪紡績 | ㉘ P.20 千歳大橋 |
| ㉙ P.14 中山製鋼 | ㉙ P.20 千林橋 |
| ㉚ P.15 岡本造船所 | ㉛ P.21 千島市場 |
| ㉛ P.16 原田造船 | |

※□は当時のあった
場所を表します

※□は当時のあった
場所を表します。



渡船

渡船は、江戸時代から始まり明治時代には、大正区木津川筋に「三軒家村の西側町渡」「三軒家上ノ渡」「三軒家渡」「材木置場町の筋違渡」「中口新田の中口渡」「炭屋新田の落合上ノ渡」「千島新田の落合下ノ渡」「宮ノ前渡」尻無側筋に「甚兵衛渡」の9箇所の渡しがあった。

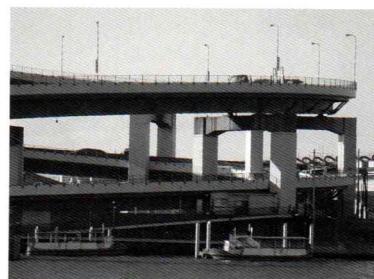
現在も大阪市内に残る8ヶ所の内7ヶ所が大正区の渡しで、千本松大橋や千歳橋では、架橋後も利用者の便宜を計るために渡しが続けられている。



①



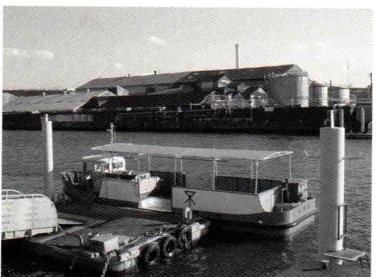
②



③



④



⑤



⑥



⑦

①落合上(おちあいかみ)渡船場
大正区千島1丁目 ⇄ 西成区北津守4丁目

②落合下(おちあいしも)渡船場
大正区平尾1丁目 ⇄ 西成区津守2丁目

③千本松(せんぼんまつ)渡船場
大正区南恩加島1丁目 ⇄ 西成区南津守2丁目

④木津川(きづがわ)渡船場
大正区船町1丁目 ⇄ 住之江区平林北1丁目

⑤船町(ふなまち)渡船場
大正区鶴町1丁目 ⇄ 大正区船町

⑥千歳(ちとせ)渡船場
大正区鶴町4丁目 ⇄ 大正区北恩加島2丁目

⑦甚兵衛(じんべえ)渡船場
大正区泉尾7丁目 ⇄ 港区福崎1丁目

大坂の玄関口



江戸時代を通して、木津川以西は新田として開発されていった。第一期の開発は、難波八十島と呼ばれるそれまで未開の島や未使用の海浜から始められ、大正区域内では、慶長15年(1610)に勘助島が開墾された。同時期に開墾された場所としては、九条島・四貫島などがある。

水害を防ぐ献策を幕府から命じられた川村瑞賢は、九条島を開削し大川の流れを安治川へ一直線に流すとともに、元禄12年(1699)には難波島を中央で開削し木津川を直流させた。開削された島は、東は月正島(浪速区)西は難波島となつた。

第二期～第四期までの各期の間はおおよそ40～50年あいており、これくらいの年月で次の新田造成が可能な土砂の堆積があったとみられる。新田は満潮になれば海没する浮州を堤防で囲んで干拓をする方法がとられた。第一堤防は沖堤と呼ばれ、高潮を外海から防ぐ大きな堤防となっている。その中には井路の堤となる小堤が巡らされていた。

上掲の写真は当館3階にある江戸時代末期の大阪湊を再現したジオラマ展示。

木津川と尻無川に囲まれた大正区域を見ると「千本松堤」の先に航路標識の杭が並び一番沖の杭には「みおつくし」が付いている。これが大阪市市章のモデルとなった。

木津川筋を北前船が遡っている。江戸時代の大坂湊は菱垣廻船に入る安治川筋と北前船や渡海船に入る木津川筋に分かれていた。北前船は春に大坂を出て下関を通って北海道へ向い、帰りも同じルートをたどって1年に一航海する船で、冬場は木津川に係留した。

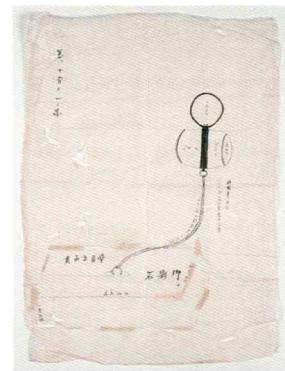
区域の一番南に浮かぶ島は平尾新田で、その北側に難波島が、三軒家のところには船番所がありジオラマには赤い支柱を立てている。尻無川両岸には色づきかけた櫨の木が植えられ、新田の回りの杭は沖堤を表す。

「水都」と呼ばれた当時の大阪の玄関口は、目線を低くして船の高さに合わせるとより楽しめる。

船囲場

航海に出ない晩秋から春にかけて木津川に船を係留する北前船が多くなり、他の船舶の航路の邪魔になつたため大阪府は三軒家川を浚渫して係留専用の船囲い場を設けた。

係留料を取り、北前船に利用されたが浚渫などの経費が高く短い期間で廃止された。その後、木津川の上流にあった造船所がこの付近に多く集まるようになり、大正7年頃には大正区にあつた32の造船所のうち、難波島と三軒家周辺には22ヶ所の造船所が集まつていた。



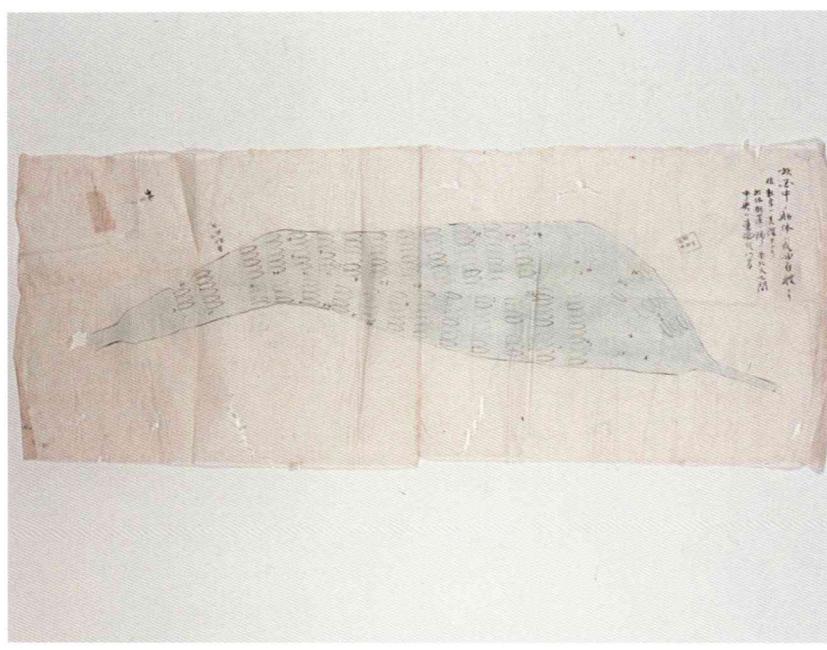
①

年	船		計
	日本形	外國形	
明治19年	六八八	下	士八
	艘	艘	艘
明治20年	三五九	二五	三五九
	艘	艘	艘
計	九百三十六	一百一十五	一千零五十一

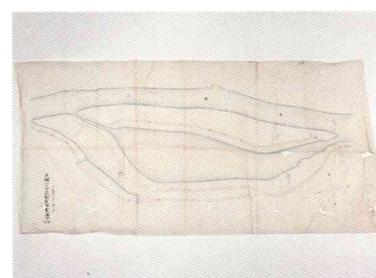
②

年	船	計
明治9年	五百九十二	五百九十二
外國形	一百一十五	一百一十五
日本形	四百七十七	四百七十七

③



⑤



④

①繫留ブイ 1/10図

②明治19年度・20年度
三軒屋船囲場日本形船定繫數比較表

③予算書(明治9年)

④船の繫留図

⑤大阪三軒屋船囲場1/2000縮図

団平船

舟(はしけ)は、港内や河川などで貨物を運ぶ船の総称で、平底で船幅が広いことが特徴となっている。

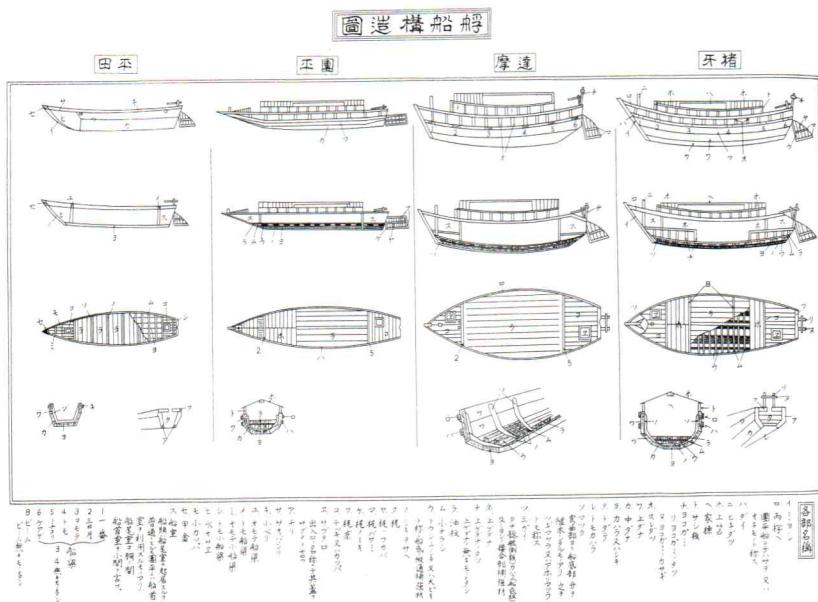
舟はエンジンを搭載しておらず、曳き舟に曳かれて移動をする。海上では猪牙・達磨船が、河川では団平・胴船・平田船が主に利用されており、中でも大阪港では猪牙・団平が他の船型より圧倒的に多くの隻数がありました。川に架かる橋の下をくぐることができるよう、高さをおさえ、より多くの荷物を運ぶことができるよう平たい造りになっていた。

市内河川・運河沿岸には大小の生産工場が設けられ、大型船が入港する大阪港と市内工場間の製品・原料の輸送にはしけが大活躍した。

「尻無川では、鉄や紀州・山陽道から運ばれてきた材木を舟に積み替えて走っていた」「昭和25年～39年までは、宇部興産の石炭を運ぶ機帆船から石炭を団平船で都島まで運んでいた」と丸一海運株式会社の社史に書かれている。



①



②

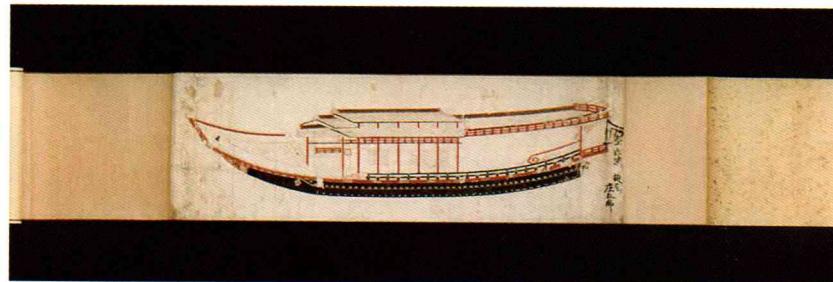


③

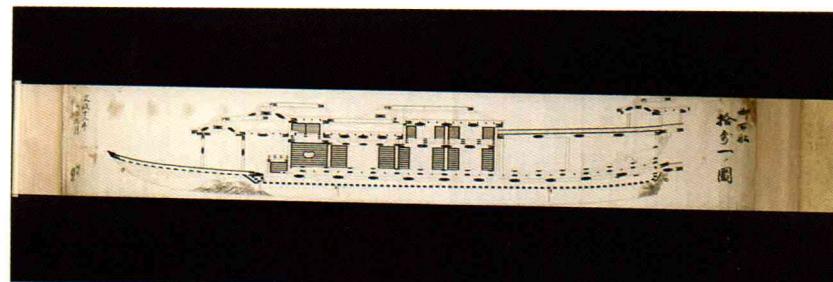
①団平船模型

②舟船構造図

③大正5年に設置された木津川焼却場へゴミを運搬する舟と曳き船(昭和30年)



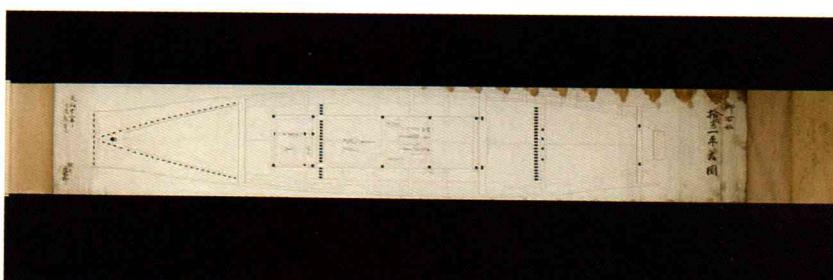
①



②



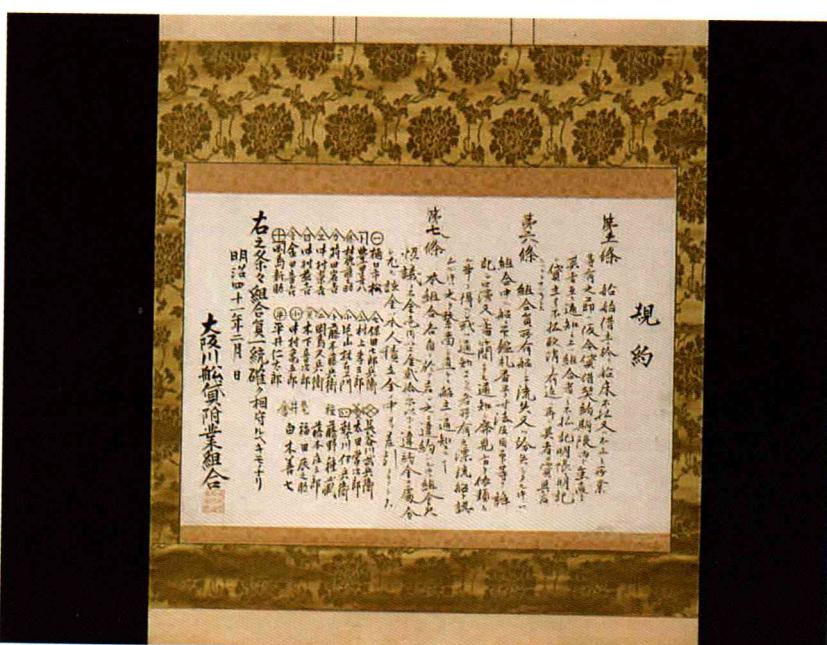
③



④



⑤



⑥



⑦

①川御座船図面

②川御座船図面(文政12年 1829年)

③衣装(袴)

④川御座船図面(文政12年 1829年)

⑤小刀

⑥大阪川船貸付業組合 規約
(明治41年 1908年)

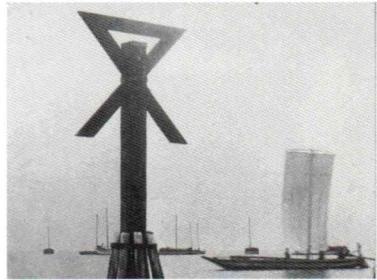
⑦御座船新造の見積書

大正区の原風景

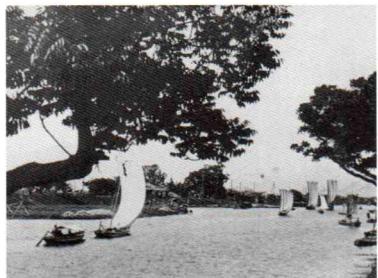
木津川・尻無川に囲まれた大正区は、慶長15年に姫島(日女島)を中村(木津)勘助が開発して、三軒家村ができたのを始め、江戸中期からの泉尾、炭屋、千島、今木、平尾、中口、上田の各新田、江戸末期には南恩加島、北恩加島、小林、岡田、千歳の新田が開発された。

新田の外周を形成する「沖堤」の中は、井路(※1)がめぐり綿花や麦、野菜を中心とした農作物が栽培されていた。

原風景として紹介する絵ハガキは、白帆を張った和船が行き交う木津川、尻無川の風情ある姿を今に伝える。



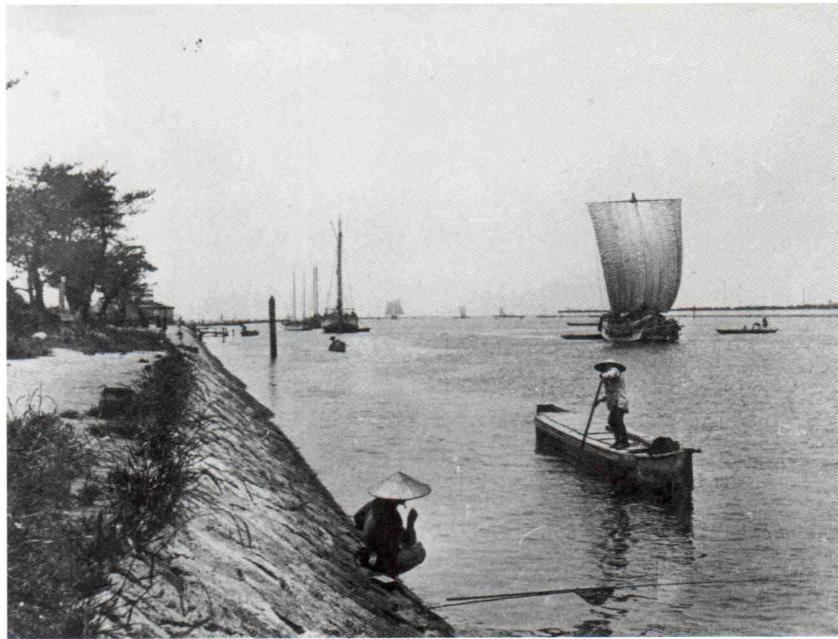
①



②



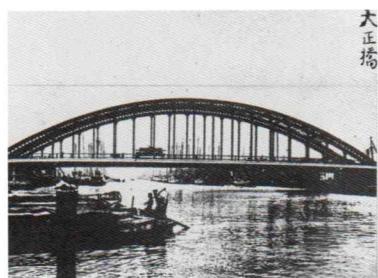
③



④



⑤



⑥



⑦



⑧

①「木津川口瀬」大阪湾の浅瀬には水路を示す杭が立てられ、これを瀬標(みおつくし)といい、明治27年4月大阪市の市章となる。(明治10年頃)

②春は汐千狩 秋は櫨の紅葉 沙魚釣に賑わう 尻無川櫨堤。

③木津川口対岸は木津川運河鶴町の辺。(明治25年頃)

④木津川千本松

⑤尻無川(明治30年頃)

⑥大正橋

⑦尻無川右岸にあった甚兵衛茶屋付近。

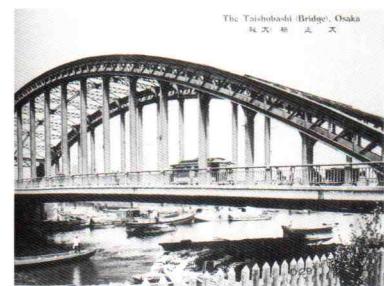
⑧千代崎橋(西区)より木津川の南方を撮影。(明治20年頃)

※1. 井路(いじ):新田内に縦横に掘られた用水路のこと。田畠の区画割の役割や干がい用水、悪水の排除、井路船を使った運搬路となっていた。

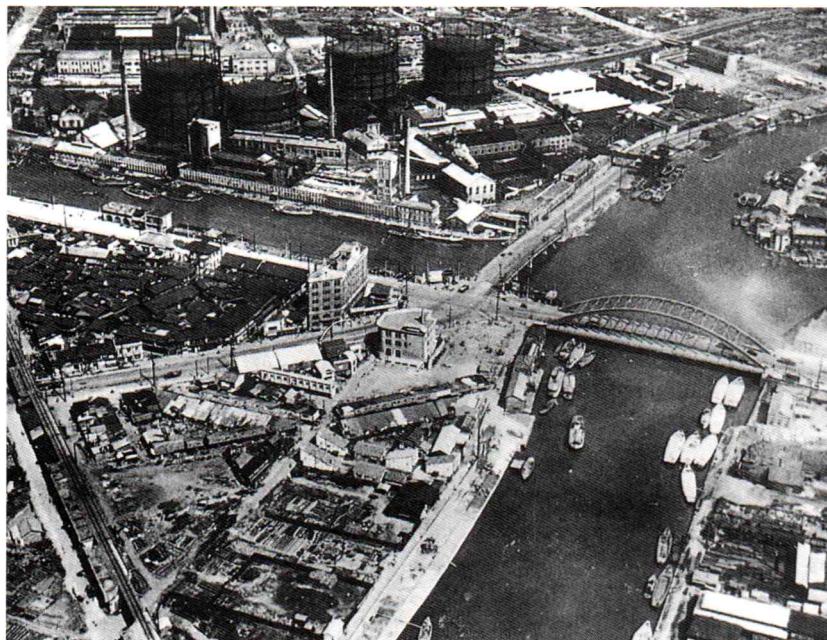
大正橋

大正橋は、大正4年8月に市電の開通とともに架けられたアーチ橋。長さ90.62m、幅22.15mで船の運航を妨げないよう橋脚を持たない橋として設計された。

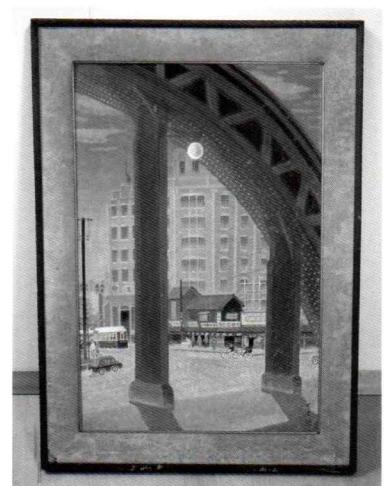
市電の廃止後の昭和44年4月に、交通混雑緩和のために広い橋が必要になったことから架け替え工事が開始され昭和49年3月に新大正橋(長さ79.96m、幅41m)が完成した。架け替え工事は、下流に側に橋を架け、古い橋を取り去った跡に次の橋を架ける手法で、2つの橋を合せて現在の大正橋となっている。



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦

①昭和初期

②昭和25年6月

③宮尾光峰 作
大正橋の橋脚の向こうに②に写っているビルが見える。

④昭和8年10月

⑤昭和35年

⑥昭和45年

⑦平成18年

大阪俘虜収容所

大阪俘虜収容所は、大正区南恩加島の木津川に面した場所に、第1次世界大戦のドイツ軍捕虜が大正3年(1914)11月21日760名が収容され、大正6年2月19日広島県似島へ移動するまでの2年数ヵ月間開設された。



①



③



②

①俘虜収容所の建物は、明治12年の「北の大火灾」で焼いた方が応急住宅として使用した建物で、畳の敷いてある和風の建物だった。写真は、建物の向こうに運動場が写っていることから、大正5年に運動場が整備された以降のものと思われる。

②郵便物の受取は捕虜にとり大きな楽しみで、特にクリスマスには中国方面や日本国内にいる家族や知人から送られた食料や衣類などの小包も多く届いた。また、捕虜の郵便料金は無料で1ヶ月1~3通家族へ送られた。

③捕虜の健康管理は毎日収容所内で行われたが、耳鼻科や眼科などは大阪陸軍衛戍病院で治療を行うこともあった。歯科治療は週3日歯科医が往診に収容所を訪れた。写真は、大阪陸軍衛戍病院で散歩しているようすを撮影したもの。

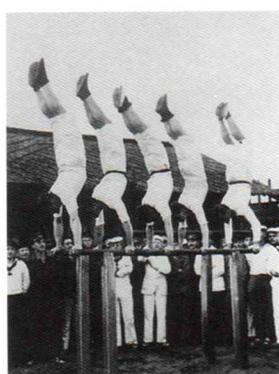
④サッカーチームの写真。大阪朝日新聞の大正6年2月18日の記事には、「水兵達は平素ならばテニスやフットボール(サッカー)に打興じて」とある。

⑤健康のために体操をすることも盛んに行われた。敷地内に運動場ができるまでは、週に1~2回収容所付近の埋め立て地で運動を行った。

⑥大正5年10月の「スポーツ週間」の時に撮影された鉄棒の演技。技術の高さが伺える。(1916年10月)



④



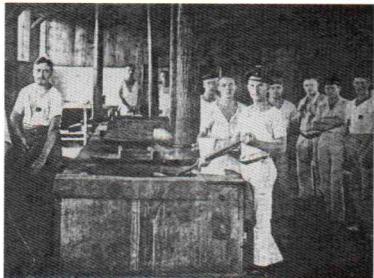
⑥



⑤



⑦



⑧



⑨



⑩



⑪



⑫

⑦収容所では自主的に演劇も行われた。舞台装置や女装などかなり本格的な演劇であった。

⑧捕虜の暮らしは朝夕の点呼以外は自由な時間で、炊事も当番で行った。俘虜収容所を視察したアメリカ大使館書記官の報告書では「複数の調理場と提供される食事は抜群です。」と書かれている。

⑨収容された捕虜は義勇軍が多く含まれており、大阪毎日新聞大正3年11月22日の記事には「大勢の捕虜の中に一人若い水兵が一挺のバイオリンを後生大事と抱えている。」とバイオリニストがいたことを紹介している。

⑩大正6年2月18日に似島収容所へ移動。毎日新聞の記事には「木津川尻の堤防を離れる時は流石に感慨無量の体で収容所の建物を振り返った。…道幅の狭い三軒家下の町にかかると両側は見物人で埋まる。」と書かれている。

⑪大阪俘虜収容所が閉鎖された後の大正7年、ヴェルサイユ講和条約が締結された。本国に帰る捕虜を乗せたパトリチア号の出航写真。撮影港は不明。

⑫「大正ドイツ友好史跡碑」除幕式典 平尾亥開(ひらおいびらき)公園にて(平成18年2月18日)

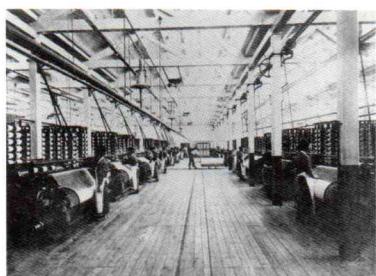
大阪紡績株式会社

明治16年7月、渋沢栄一や藤田伝三郎が出資した大阪紡績会社(通称：三軒家紡績)が1万5百鍾の機械を備え操業を開始した。

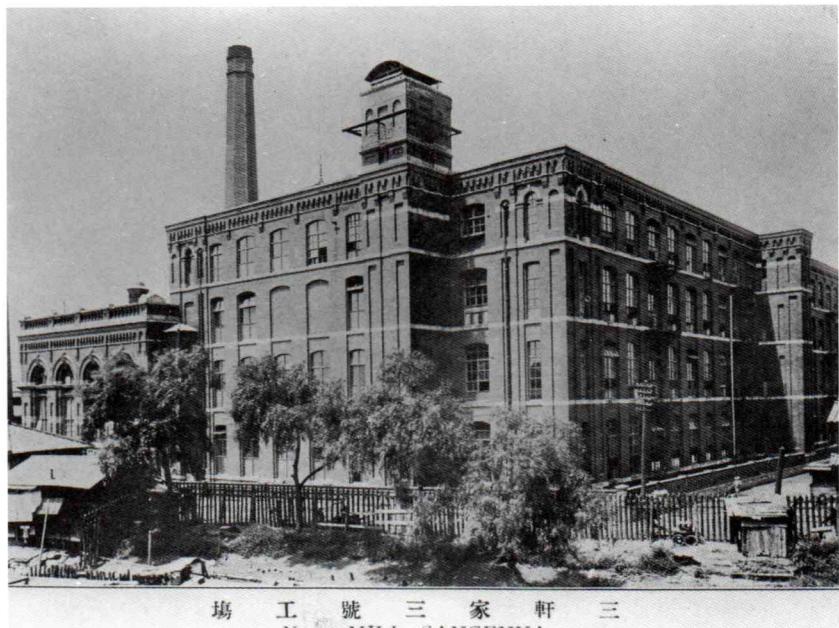
三軒家は江戸時代から船着場として賑わい、海上輸送の便利さから選ばれたといわれている。明治19年には発電機を購入し民間で初めての電灯がともり、工場全体が不夜城のように浮かびあがった。

また、大阪紡績を核として数多くの紡績繊維会社ができた明治20年代以後は「東洋のマン彻スター」として産業革命で有名な英國のマン彻スターと並び称される発展をとげた。

大正3年に四日市の三重紡績と合併して東洋紡績と改名、太平洋戦争の激化とともに軍需工場に転換させられ昭和20年3月の大空襲で焼失した。現在でも東洋紡績には明治16年開業当時の建物のレンガが保存されている。



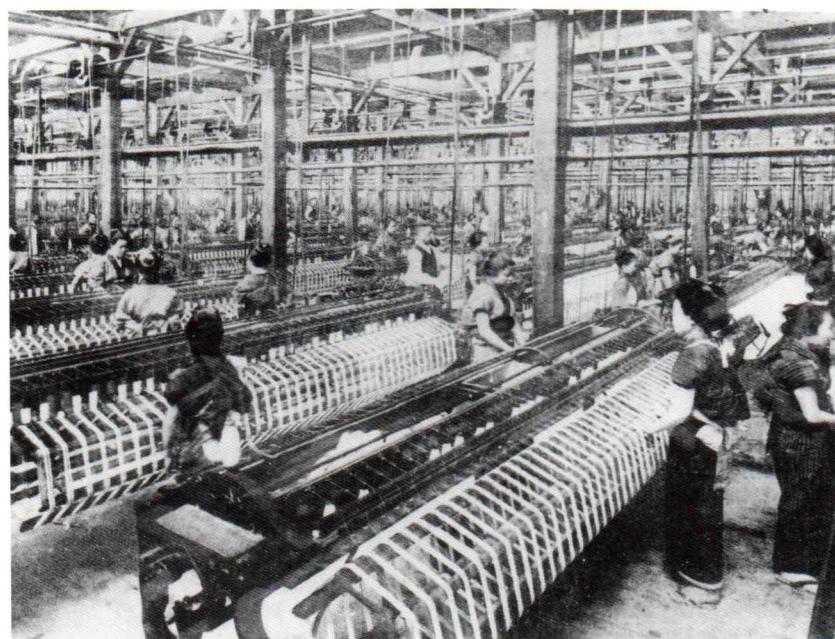
①



③



②



④



⑤

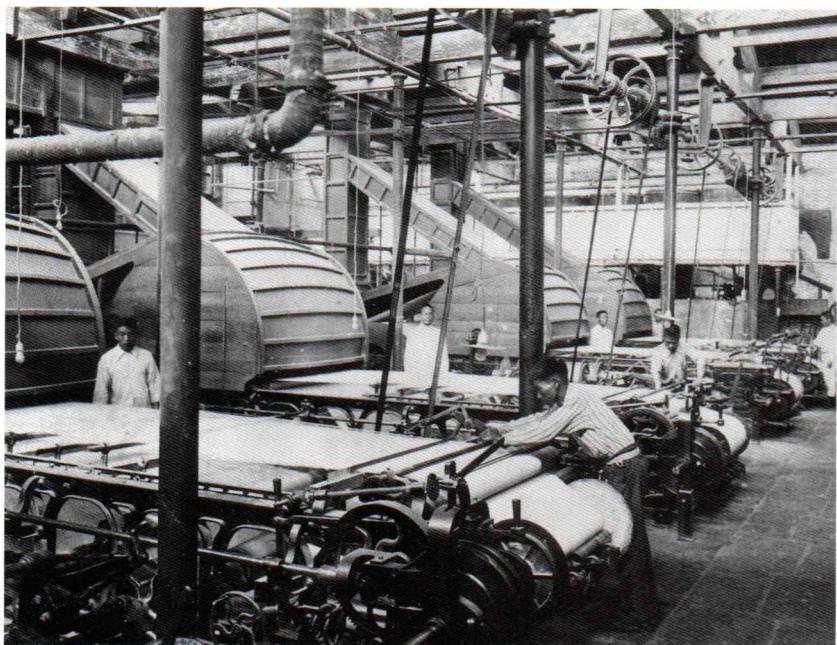
①整経機(昭和初期)

②粗紡(昭和初期)

③三軒家3号工場

④紹機(かせき) (昭和初期)

⑤三軒家工場 全景



⑥

⑥糊付け室(昭和初期)

⑦玉造室(昭和初期)

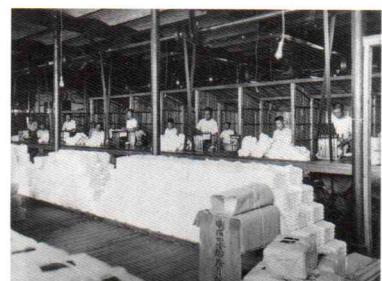
⑧織布仕上室(昭和初期)

⑨寄宿所 庭園の一部(三軒家工場内)

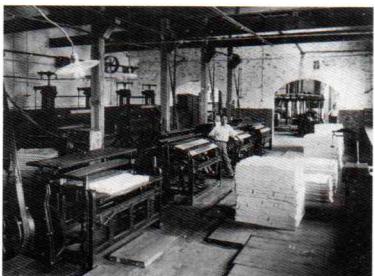
⑩女子作業服

⑪「近代紡績発祥の地」の碑

⑫寄宿所内清修学校教室(昭和初期)



⑦



⑧



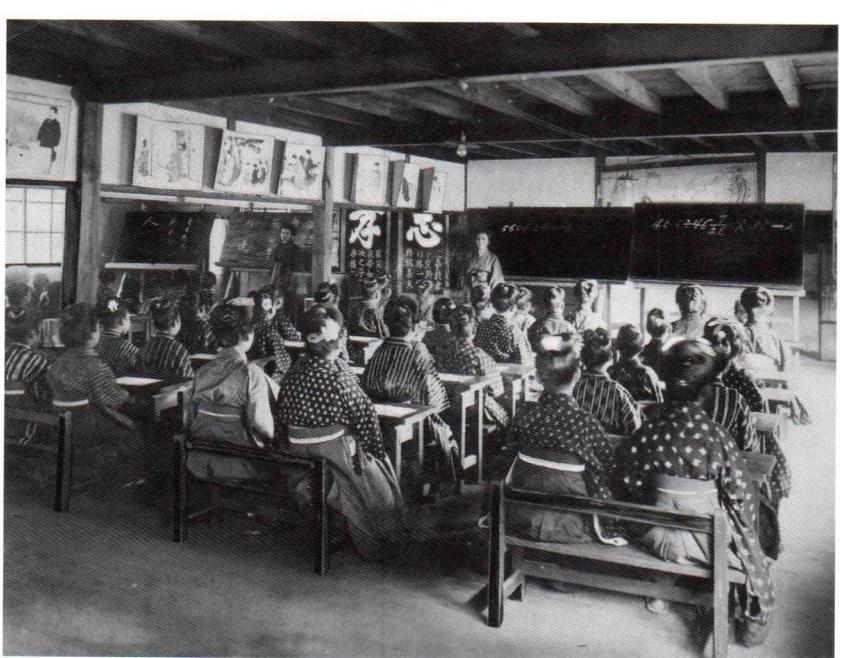
⑨



⑩



⑪

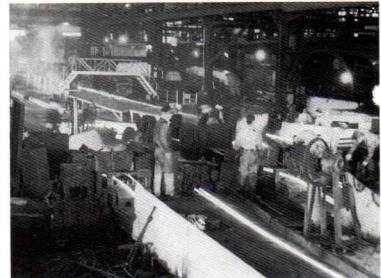


⑫

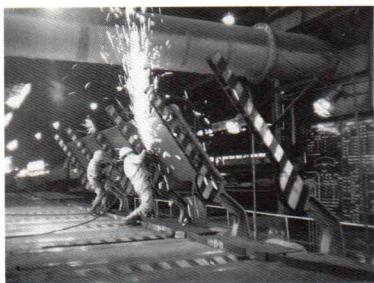
株式会社中山製鋼所

大正12年木津川河口の埋立地に(株)中山悦治商店を設立。

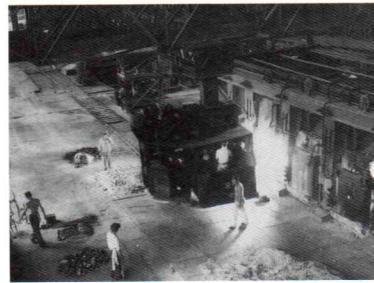
昭和9年に(株)中山製鋼所に社名変更をした。現在も船町に本社と工場を有し、平成14年に高炉を休止した折の「大阪の火が消える」という新聞見出しも記憶に新しい。「微細粒熱延鋼板」により「大河内記念技術賞」を受賞したことは、鉄の未来を追い続ける姿勢の現われともいえる。



①



②



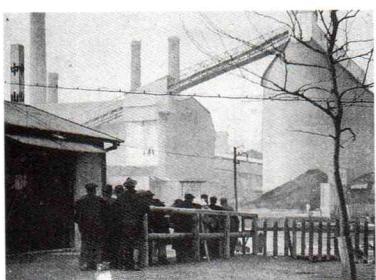
③



④



⑤



⑥



⑦

①釘やボルトなどに加工する為の線材の生産ライン。昭和56年頃より、ラインは無人となっている。(昭和30年頃)

②製品の精度を高める為の作業。(昭和30年頃)

③平成12年熱延工場の稼動を機に平成14年高炉を止めて、リサイクルを中心とした加熱炉が現在活動中。写真は、昭和30年代の平炉を撮影。

④フェリー「松丸」を使っての通勤風景。

⑤木津川の南側からの空撮。昭和山が更地になっている。(昭和31年)

⑥木津川運河の渡しを待っている人々の姿かと思われるが、左端の柱に「中山」と見え中山製鋼所の近くかと思われる。(昭和8年)

⑦(株)中山製鋼所の旧正門

岡本造船所

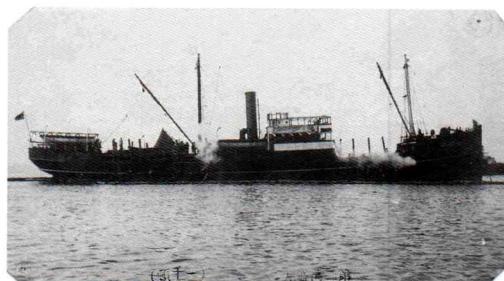
岡本造船所は、造船所の集まる難波島に大正期にあった造船所。紹介する写真とともに当館に寄贈された資料には、大正5年4月25日締結の「木造汽船製造請負契約証書」も含まれている。製造する船舶は、「木造汽船総トン数千tとす」とあり、引渡しは大正5年10月31日に大阪通信管理局海事部の検査場航海許可を受けるようになっている。建造期間は、約半年ということであろうか。



①



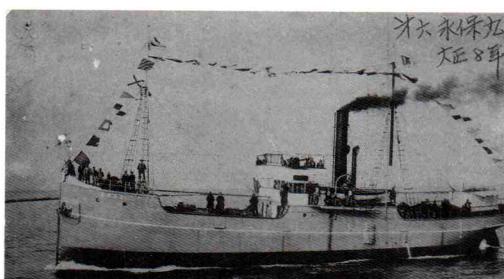
②



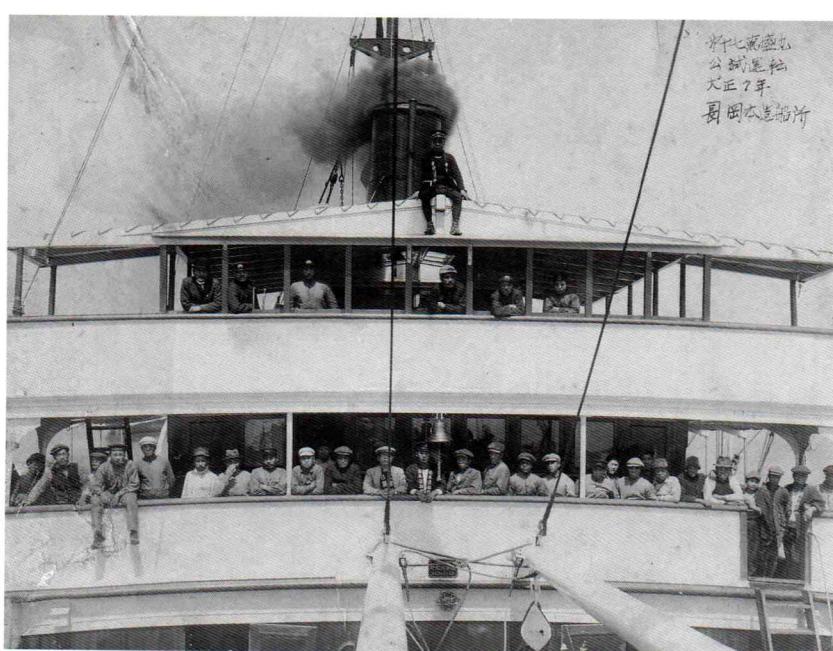
③



④



⑤



⑦



⑥

①運動会の集合写真(大正8年)

②第五萬盛丸(二千二百頓)

③二萬盛丸(一千頓)

④十二萬盛丸(四百頓)

⑤第六永保丸(大正8年)

⑥木津川船架の工事現場(大正7年)

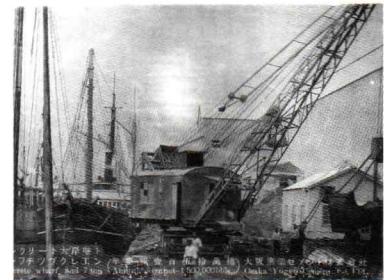
⑦第十七萬盛丸 公試運転(大正7年)

大正区の工業

大阪紡績(明治16年)に続き、明治20年代を中心に藤永田造船所などの造船工場やレンガ製造工場が次々に創立した。

続いて日清戦争前後から金属、機械工業が盛んとなり、大正期にはセメント、製鉄、造船、造機などの大工場が水運の至便さから競って進出し、大正区の工業化は著しく進展した。

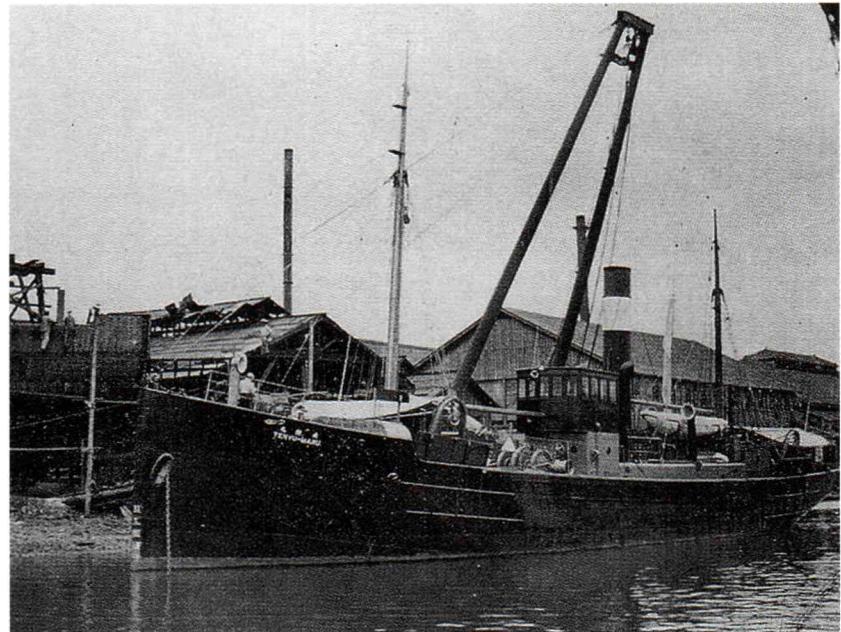
大阪港の築港計画では、港湾施設、臨海工業地帯の形成を目的に進められ、それにともなう埋立ては、鶴町、福町、鶴浜通、船町が大正15年までに完成した。



①



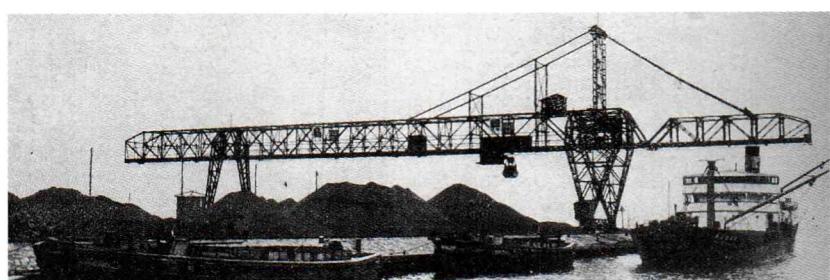
②



④



③



⑤

①大阪窯業(株)の鉄筋コンクリート
大岸壁

②大阪窯業(株)の廻轉窯

③原料部 超同期電動機
大正6年大阪窯業(株)のセメント部
として操業開始。昭和38年大阪セ
メント(株)に社名変更。

④明治36年2月に創業した日立造船大
阪工場の前身にあたる原田造船鉄
工所の写真。(明治43年頃)

⑤鶴町にあった貝島商業株式会社の
鶴町貯炭場(昭和9年)

貯木場

大阪市内の材木市場は、江戸時代から始まり、立壳堀川、西長堀川、境川運河と移動した。

大正7年からは、大正運河を幹線水路として、各所に貯木池を設け木材町を造成した。昭和7、8年頃の最盛期には業者数500～600軒といわれ、小林町を中心に豪商が軒を並べていた。

現在の平林(住之江区)への移動は、昭和20年代から順次行われた。



①



②



③



④



⑤

①この付近には銀行や市電「小林町」停留所などの公的機関があったが、材木業者の移転によるもののか閑散とした風景になっている(昭和29年頃)

②泉尾から南、木津川運河から北の空撮写真。内港化される前の千歳町の貯木場もよく見える(昭和17年)

③小林町の貯木場(昭和初期)

④貯木場での遊びは危険なため注意を促す看板が立てられた。北恩加島小学校の名前が見える(昭和40年頃)

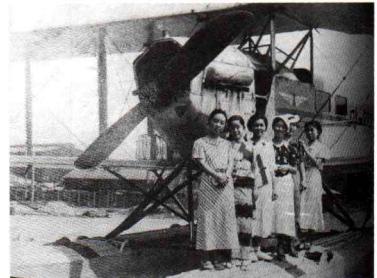
⑤北恩加島付近の貯木場。現在は大正内港となっている。(昭和45年)

大阪飛行場

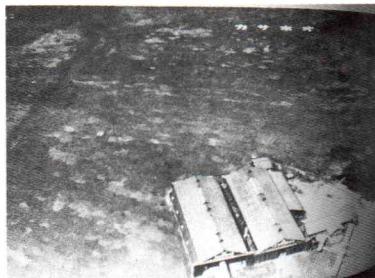
大阪飛行場は、当時の日本航空株式会社(大正12年4月設立、昭和4年3月3日解散)が木津川尻埋立て地に水上機による定期航空のためを開設された。

水上機の運行は大正12年7月に始まり“大阪-別府”間の定期航空や“大阪-京城(現:ソウル)-大連”間の国際定期郵便飛行が行われた。

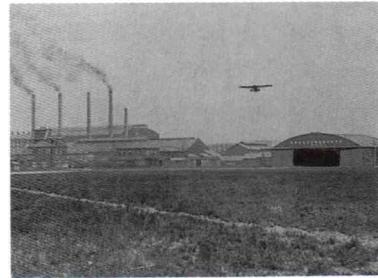
昭和4年4月からは日本航空輸送が営業を開始し、“東京-大阪”間“大阪-福岡”間に毎週12往復、“福岡-京城”間、“京城-大連”間に毎週6往復の定期航路を開設した。昭和14年1月には、大阪国際飛行場(現:伊丹空港)が開場し、木津川は水上機専用の発着場となった。



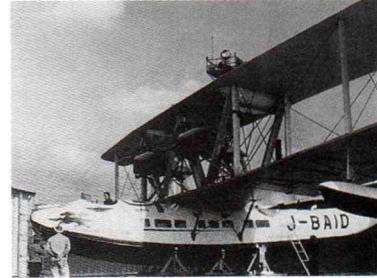
①



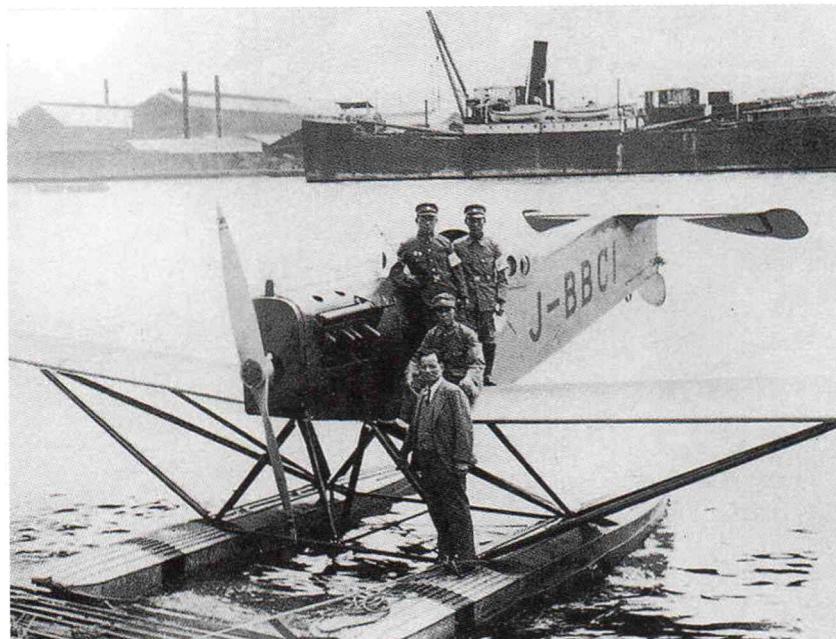
②



③



④



⑤



⑥



⑦

①一般公募されたエアガール。大阪-高松-松山のコースを1日1往復した。背景の飛行機は14式水上偵察機を旅客機に改造したもの。(昭和10年頃)

②昭和4年4月に木津川飛行場は大阪飛行場として逓信省から公共飛行場の指定を受けた。河川に発着していたので水上機や飛行艇が主力。写真上方に空港標識「オホサカ」が見える。

③飛行場の北東から降りてくる飛行機を撮影。隣接して工場が建っているのが見える。(昭和初期)

④英國製スーパーマリン・サザンブトン艇。昭和10年代には、高松や松山へ350馬力のエンジンを轟かせ、瀬戸内海を飛んだ。(昭和10年代)

⑤ドイツ製ハンザ水上機と練習生。乗員訓練用として長期間使われていた。乗員2人、最大時速168キロ。(大正12~13年頃)

⑥右から13式水上偵察機、神風式偵察機、浦風式偵察艇の新鋭機が並ぶ。(昭和13年頃)

⑦木津川大橋のたもとに建てられている。「木津川飛行場跡」の碑

市電のある風景

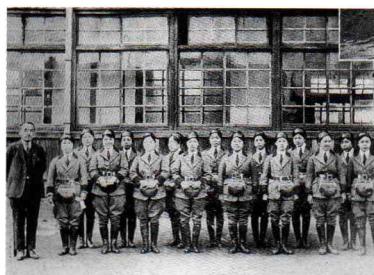
大阪市の市電は、明治36年9月に一期線の“築港桟橋－花園橋”間が開通した。

大正区内では大正4年8月に三期線の九条－高津線“岩崎橋－大正橋－日吉橋”間が開通したのを始め、大正11年5月の鶴町線開通まで4線が順に敷設された。鶴町地区には、市電の車庫(大正12年4月開設)や福町車庫(大正15年4月開設)場、鶴町変電所などがあり電車の基地となつたが、昭和48年8月の鶴町線廃止とともに使命を終えた。

市電は昭和44年4月の九条－高津線の廃止により大正区から姿を消した。



①



②



③



④



⑤



⑦



⑥

①昭和2年に開通した三軒家新千歳町線の泉尾梅之町3丁目(現在の泉尾6丁目)付近で撮影。(昭和10年)

②市電の人気挽回のため昭和9年より女子車掌を採用し、制服は市バスと同じ乗馬服スタイルであった。(昭和10年頃)

③軍需用産業の担い手として女子が動員されたが、男子と押し合って乗るのは不便と、鶴町線に女性専用電車が登場し、専用乗場も設けられた。(昭和17年)

④“境川町”から“大正橋”へ向かうこの路線は、大正4年に開設されたが、市制80周年の年である昭和44年に廃止された。(昭和42年頃)

⑤大正12年開設つれた鶴町車庫は戦後鶴町4丁目に移動し昭和35年再建された。

⑥昭和57年の資料では、大正区を走るバス系統20線のうち鶴町4丁目が起点となるのは9路線あった。

⑦鶴町線は、松島南恩加島町線や三軒家新千歳町線とともに昭和42年8月1日に廃止された。最終電車の乗務員への花束贈呈の様子。(昭和42年)

路線名	区間	開通	廃止
九条高津線	岩崎橋－大正橋－日吉橋	大正4年8月3日	昭和44年4月1日
松島南恩加島町線	大正橋－永楽橋	大正7年8月4日	昭和42年8月1日
	永楽橋－木津川運河	大正7年10月26日	昭和42年8月1日
鶴町線	鶴町四丁目－大運橋通	大正9年12月28日	昭和42年8月1日
	小林町－鶴町四丁目	大正11年5月5日	昭和35年10月10日
三軒家新千歳町線	三軒家－新千歳町	昭和2年11月28日	昭和42年8月1日

大正区の橋

運河や掘割には多くの橋が架けられ、大正区は橋が多いことでも有名となった。昭和45年に埋立が完了した大正運河に架けられていた橋も多くあり、千島大橋、千歳大橋など主なものだけでも36の橋が姿を消した。



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧

①「大運橋」だいうん
(大正9年-木橋、昭和33年-架け替え)

②「嘉平次橋」かへいじ
(大正12年～昭和45年)

③「大船橋」おおふな
(昭和11年-可動、戦後-運転休止、昭和53年-普通橋に架け替え)

④「千林橋」せんりん
(大正12年～昭和45年)

⑤「萬歳橋」まんざい
(大正12年～昭和45年)

⑥「材木橋」ざいもく
大正運河の工事終了とともに姿を消した。(大正12年～昭和45年)

⑦大正中央中学校の校庭に保存されている「材木橋」の親柱

⑧大正中央中学校の校庭に保存されている「嘉平次橋」の親柱

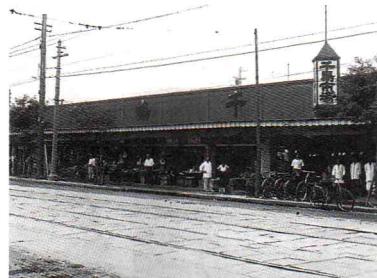
暮らしの情景

明治5年の「学制」発布を受け、大正区内では明治8年に千島小学校をはじめとして、泉尾小学校、三軒屋小学校が開設。大正時代には、人口の激増により次々に学校が増設された。

大正区の商業の発展は三軒家から始まり、明治44年三泉共同市場が開設された。大正年間には、鶴町市場・泉尾市場などが開設され、市場周辺の商店街の形成にも大きな影響を与えた。



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨

①泉尾1丁目商店街で行われたラジオ体操の会。当時は道路をこのように占有しても問題はなかった。(昭和17年頃)

②大正7年開設の日用品・食料品を市価より安く提供するために開設された公設市場で、小林町市場とも呼ばれた。(戦前)

③街灯が連なり看板がせり出しており、住民の生活を支える盛況ぶりは今も変わらない。(戦前)

④着物に白いエプロンの保母さんと遊戯をする鶴町第2託児所の子供たち(大正10年)

⑤大正10年4月鶴町尋常小学校(児童数599人)として開校された。写真是、昭和6年5月1日に創立10周年式典が行われた際の記念写真。

⑥昭和45年11月に昭和山で植樹祭が行われた時の風景。

⑦買い物客の人々で賑う千島市場。ワンピースの女性などから夏の暑い頃の撮影かと思われる。

⑧引き潮に戯れる子どもたち(昭和28年)

⑨了照寺の法要に集った着物姿のお稚児さんの集合写真(昭和49年3月)

台風被害

室戸台風は、昭和9年9月21日最大瞬間風速60m以上という超大型台風が西神戸に上陸。大阪では、最低気圧954.4ミリ（現hpa）を午前8時前に観測した。四天王寺の五重塔が倒壊するなど市内は甚大な被害を受けた大正区では、全域が浸水、死者は行方不明者を含め190人、家屋の被害は22,635戸の大惨事となった。

ジェーン台風は、昭和25年9月3日午後1時ごろ最大瞬間風速44.7mという台風が神戸に上陸。満潮時の高潮と地盤沈下が重り、最大潮位3.85mの高潮による河川の氾濫があいついだ。浸水被害としては、室戸台風を上回った。大正区内では、区域の83%が平均1.9mの深さに浸水、死者は行方不明者を含め221人、被害家屋は10,654戸となり、この台風後には、高潮防御対策事業が始まった。



①



②



③



⑤



④

①鶴町にあった映画館。風で電柱が傾き、外壁が吹き飛ばされ、濁流で1階部分が破損するなど大きな被害を受けた。(昭和9年)

②台風で浸水した南恩加島町。浸水で汚れた衣服を干すなど片付けのようすが伺える。(昭和9年)

③多くの船が尻無川泉尾付近に押し上げられ台風の惨状を伝えている。(昭和9年)

④電車や人々の腰まで水に浸るなど高潮のようすが伺える。写真前方に見えるのは大正橋。(昭和25年)

⑤2メートル以上の浸水被害があつた大正橋付近。水が引いた後、輸送手段として活躍したボートや建物がくずれた木材などの街のようすが被害の大きさを物語る。(昭和25年)

⑥浸水がひいた後の小林町。貯木場から流れた木材が道路をふさいでいる。材木の上に板をかけその上を歩いている人の姿。(昭和25年)

⑦万歳通りの応急住宅。(昭和26年)



⑥

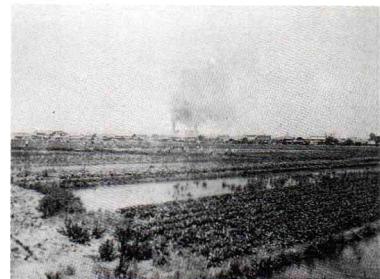


⑦

大正運河

千島土地株式会社が大阪木材市場土地株式会社と協力し、木津川と尻無川を結ぶ運河の掘削を計画、岩田土地も加わり大正8年から工事を始め、大正12年6月に完成した。完成した運河は、延長1,963m、干潮水深1.8m、工費約30万円という大工事であった。

運河は、昭和45年に埋立工事が完了した。



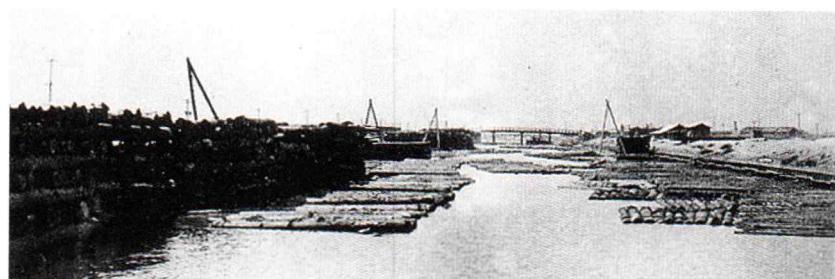
①



②



③



④



⑤

①大正運河開削前の風景で、まだ貯木場が発達する以前には何もない広々とした土地が広がっていた。一方で臨海工業地帯としての開発が進み遠くに黒煙を上げる工場が見えるのが対象的。(大正後期)

②大正運河予定地の表示。
千島土地(株)岩田土地の名前が見える。(大正9年頃)

③大正運河の工事風景。(大正10年頃)

④現在の小林東と千島の境あたりの竣工した大正運河。運河の完成により貯木場が栄える。(大正12年頃)

⑤運河での遊びを注意する看板。
大正区少年を守る会と泉尾東児童会の名前が見える。

盛土と高潮対策

大正内港化工事による土砂を利用した送砂盛土は、昭和26年から開始された。ポンプ式浚渫船による浚渫土量は309万300立方mで、すべて臨港地区、西部低地区の盛土に利用した。

盛土は25年のジェーン台風を契機に、当初計画を変更し、O.P(※1) (+) 5.0~4.5mとした。



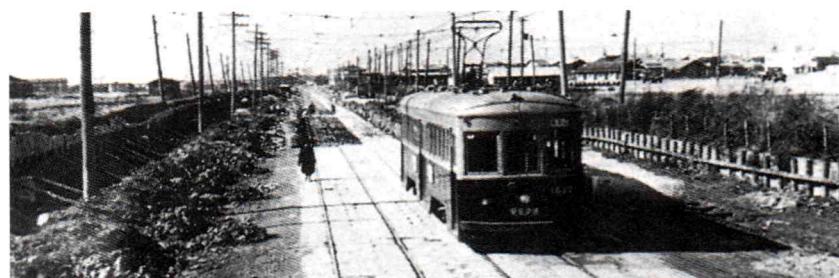
①



②



③



④



⑤



⑥

①昭和25年のジェーン台風以降、高潮の脅威から都市と住民を守ろうとして計画された防潮堤の建設が進む北恩加島。

②本格的に盛土工事開始する前に築堤(高さO.P+4.5m)をする。(昭和33年)

③盛土工事が進む中、下水道マンホールが半分埋まっているのが見える。

④昭和42年の市電が廃止前から路線両脇は盛土が進む。走る市電は鶴町行き。(昭和40年頃)

⑤昭和25年のジェーン台風以降、高潮対策としてゼロメートル地帯解消に向け、送砂管が櫓で組まれる。(昭和27年)

⑥千島町付近の貯木場の跡地に造成中の千島公園。地下鉄工事の廃土を利用して出来た人口の山(昭和山)も見える。(昭和40年代)

※1. O.P : Osaka Peilの略
明治7年中に観測された大阪港天保山の最低潮面のこと、大阪の土木工事の基準面となっている。

大正内港の修築

大正内港は、尻無川下流左岸一帯、旧千歳掘東岸および西岸の一部を拡幅浚渫して泊地を造成するとともに、新水際線に埠頭施設を建設し、主に内貿商港区として整備する目的で計画された。

また、内港化工事で発生する土砂は背後地に送砂し全面盛土用として利用され、災害の無い街づくりの一助となった。



①



②



③



④



⑤



⑥

①鉄鋼埠頭予定地。（北恩加島2丁目付近）に盛土する工事車両。（昭和33年3月）

②新千歳小学校より鶴町方面を撮影した新千歳跡。現在は、大正内港となっている。（昭和29年頃）

③大正内港化工事中の空撮。内港予定地を浚渫（しゅんせつ）する土砂は貯木場の埋め立てや盛土に利用された。（昭和32年）

④旧千歳小学校からの撮影。写真右の方には新千歳貯木場が見え、現在は大正内港となっている。（昭和29年）

⑤北恩加島の一部として整備した鉄鋼埠頭。船の様子が当時を物語っている。（昭和40年）

⑥鉄鋼共営埠頭の南岸壁が整備中であるが、ほぼ全貌を現しつつある大正内港。（昭和49年）

大正区のあゆみ

- 慶応 4年 7月 大阪港開港
- 明治16年 7月 大阪紡績三軒家工場操業開始
- 明治30年 4月 大阪市編入 西区に属する
- 8月 大正区南部の新田地先埋め立て工事はじまる
- 10月 大阪築港工事起工
- 大正 4年 8月 大正橋竣工
市電（岩崎橋～大正橋～日吉橋間）開通（区内最初）
- 大正 5年 3月 木津川運河完成
- 大正12年 5月 大正運河完成
- 大正14年 4月 港区発足（西区から分区）
- 昭和 7年10月 大正区発足（港区から分区）
- 昭和 9年 9月 室戸台風来襲（全市被害甚大）
- 昭和11年 5月 木津川運河に可動橋の大船橋完成
- 昭和20年 大阪大空襲（3/13, 6/1, 6/15）
- 昭和24年 9月 鶴町付近の送砂盛土開始
- 昭和25年 9月 ジェーン台風来襲
- 昭和36年 4月 国鉄（現：JR）大阪環状線開通（大正駅開設）
- 昭和36年 9月 第2室戸台風来襲（市内の被害甚大）
- 昭和40年 2月 鋼材ふ頭 供用開始
- 昭和45年11月 千島公園（昭和山）の植樹式
木津川、尻無川両防潮水門完成
- 昭和48年10月 千本松大橋完成
- 昭和50年度 大正内港による拡幅、浚渫工事完了
- 平成 6年 9月 新木津川大橋完成
- 平成 7年 2月 なみはや大橋完成
- 平成15年 4月 千歳橋完成

開会式



日 時:平成 18 年 3 月 18 日
午前 9 時 45 分

場 所:なにわの海の時空館
エントランス棟

式次第:

主催者挨拶

なにわの海の時空館 館長

石浜 紅子

来賓祝辞

大正区コミュニティ協会 理事長
中道 良明

テープカット

大正区コミュニティ協会 理事長
中道 良明

大阪市大正区 区長

西村 東一

大正区民生委員協議会 会長
浅野 八郎

大正区地域女性団体協議会 会長
川本 悅子

なにわの海の時空館 館長
石浜 紅子

(敬称略)



◆展示協力一覧

大正区の歴史を語る会	加賀市役所
株式会社中山製鋼所	鳴門ドイツ館
東洋紡績	郷土出版社
丸一海運株式会社	産経新聞大阪本社
大正区役所	大阪市港湾局
	社団法人大阪港振興協会

(順不同)

◆出版物からの転載

頁	番号	出版社名	頁	番号	出版社名
6	③	郷土出版社	21	①, ⑦	郷土出版社
9	①	郷土出版社		④, ⑤	産経新聞大阪本社
14	⑥	郷土出版社	22	①	産経新聞大阪本社
16	④, ⑤	郷土出版社		⑤	郷土出版社
17	①, ③	郷土出版社	23	①, ③	郷土出版社
18	①, ②, ④ ⑤, ⑥	産経新聞大阪本社	24	⑥	郷土出版社
19	②, ③, ④ ⑦	郷土出版社	25	②, ④	郷土出版社

奥付

春季 写真パネル展 「懐かしい大正区の風景」

発行日 平成18年6月

編集・発行 大正区役所

〒551-8501大阪市大正区千島2-7-95

電話番号(06)4394-9684

なにわの海の時空館

〒559-0039大阪市住之江区南港北2-5-20

電話番号(06)4703-2900

印刷

株式会社N P C コーポレーション



大正区の花つつじ

大正区役所